

第一章 タイ・仏印国境

近衛歩兵第五連隊の出撃……………9
バンコック一番乗り……………13
戦火に備えて……………20

第二章 宿望のマレーへ

シットラライン通過……………29
岩畔梯団南下す……………42
岩畔追撃隊の突進……………46

第三章 ムアル河畔の戦闘

マチ付近の戦い……………51
悪条件中の進撃……………57
シンバンゼラムの戦い……………64
ムアル市占領……………77

第四章 バクリの殲滅戦

トクラヂヤの不規遭遇戦……………80
ムアルの回顧……………85
中隊長の戦死……………87
バクリ占領……………93
大柿大隊の奮戦……………100

第五章 二つの大勝利

バリットスロンの潰滅戦……………123
ペラドドック峠の争奪戦……………129
ペラドドック戦までの回顧……………135

第六章 戦勢、海岸道に移る

バトバハの攻略……………139
バリットボタックの雨中戦……………145

第七章

シンガポール攻略

レンギットの潰滅戦……………	148
連隊長負傷す……………	155
ジョホールへ……………	160
陽動作戦開始さる……………	164
ジョホール水道を渡る……………	171
八〇、一八〇高地付近の戦闘……………	187
千代田山の戦闘……………	190
八六高地付近の戦闘……………	197
シンガポール陥落……………	200
あとがき……………	207

ある。

国司部隊長の指揮下に入った第三大隊は、中央第一線部隊として、すみやかにカラン飛行場を占領すべき命令を受けた。一刻も早く市街に突入しなければならぬ。攻撃が巧妙であるに越したことはないが、遅れてはならない。早い方がいい時機なのだ。尖兵と共に部隊の戦鬪を進んでいた大隊長波多江少佐は非常に元氣である。敵は最後の反抗を企図しているのか、いないのか、ときおり敵の機関銃弾が飛んでくる。本隊は停止して待機する。

戦前に日本商店に勤めていたと自称する日本語の巧みな一人の中国人が、われわれのところに近づいて、水の世話をしてくれるので、わが方の兵も氣を許して彼と雑談しているとき、どこからともなく飛んできた小銃弾が、この親切な中国人ののど仏を挫いて行った。

敵弾の落下が烈しくなる。いまここで斃れた中国人の妻らしい女が、降り注ぐ弾丸をもとめせず、戸外に飛び出して、すでにこと切れている夫の屍を抱いて泣いている。われわれは彼女に弾丸があたりかねばよいがと心に念じつつ、このうるわしい光景に見とれていた。

情は国境をこえ、民族をこえ、時をこえて人々の心を打つものである。銃声は激しくなる一方であったが、ここ、ゴム林の中は、草丈が高く、敵情はもとより友軍の様子さえよく見えないので、一切を音で判断するよりほかに手はない。本隊を指揮していた妹尾中尉は、太田小隊を尖兵中隊の左に展開させて、友軍の左側に対する敵の逆襲に備え、自らはいつでも新しい状態に應じるように部下を集結して待機していた。第一線は苦戦らしく、負傷者が引つ切りなしに後送されてくる。波多江少佐と尖兵中隊長川上中尉がそろって負傷した、との

報告がくる。われわれは今敵兵最後の抵抗線にぶつかっているのである。このとき妹尾は今度はおれの番だ。この地こそ、おれの最初にして最後の血を流すところなのだ、と覚悟をきめた。覚悟がつくと、過去の出来事が走馬灯のように頭の中を通り過ぎて行く。

バクリでは、生きてジョホールバルは見られまいと覚悟したおれであったではないか。そのおれがここまで生きてきたことは、今は亡き戦友にくらべ、どれほどもうけていないか知れない。おれも大柿大隊長のように桜色をして死んで行きたい。と最後の覚悟に行きつくのであった。こんな瀬戸際にのぞんで死ぬことは楽である。もはや何物も気にかかることはない。身近で敵砲弾が炸裂したので、妹尾中尉は現実にはひきもとされた。

そのとき伝令が近づいてきて、

「妹尾中尉殿。波多江部隊長殿がお呼びです」と告げる。肩を射抜かれた波多江少佐は、ゴムの木に腰掛けて休んでいる。妹尾が、「いかがでありますか」と問うと、
「うん、つまらないうすらをして、ちょっとやられた。少し痛むから御苦労だが、僕に代わって部隊を指揮し、前面の敵陣を突破してくれ」と命令する波多江少佐は悠然たるものであった。

戦況は極めて激烈であり、容易に前面の敵陣は突破できそうもない。

陽が傾けば間もなく夜になる。国司連隊長と今井参謀長の顔が見える。妹尾は上司に当前の状況を報告した後、今夜夜襲することにきめる。

ドラム缶のような砲弾が異様な飛行音をたててわれわれの頭上を越え、はるか後方にある司令部の所在地付近で大地を震わすような音を立てる。われわれがいまいるところは余りにも敵に近すぎるので、こんな物騒な砲弾は飛んで来ない。敵の要塞から撃ってくる巨砲の声は一晩中絶えなかった。

夜襲の準備は着々とすすめられた。

太田小隊を搜索拠点に出して、突撃位置を搜索させたが、意外にも敵陣地は堅固な上、その両翼が判明しない。最初考えていた敵の右翼を襲う案は放棄せざるを得なくなった。けれども敵陣地の直前には、広いクリークが深々と水をたたえていることが分かった。

妹尾は夜襲は困難であって、成功の見込みは薄いことに気づき、決心を変更して、明払曉わが砲兵支援の下に、攻撃することにした。いく組かの斥候を派遣して、敵情を綿密に偵察した結果、二月十五日午前三時までに敵情、地形は明らかになった。が、夜ふけてからの妹尾の心は重かった。せっかく夜襲計画を変更したが、もし払曉攻撃に失敗したらいかにすべきか。

いま、他隊に編入されているわれわれの失敗は、沢村部隊の不名誉を公示することになるのである。そのときおれは死をもって失敗の責任を償うよりほかに途はない、と最後のハラをおのれの死に見つけた妹尾の気持は、いく分か明るくなった。

払曉前に攻撃陣地を静かに進め、左に妹尾中隊、右に川上中隊、中央に高平機関銃隊を配置した。

不安の夜が明けて行く。

大空が、ついで大地が、しだいに薄光りを帯びてきた。妹尾は心臓を高鳴らしながら、「攻撃前進！」を命令した。高平隊の重機がまず火を吐く。敵陣は地面から一メートルくらいの高さをもって草を薙ぐように突進してくる。前進は極めて困難である。「天皇陛下万才！」の聲が、妹尾の心臓につきさすように聞こえてくる。いうまでもなく、このめでたい叫びは、戦場では負傷者が出たことを意味するのである。午前九時頃、国司連隊の副官が敵弾下を妹尾のところまで飛んできて、「波多江大隊は以後、吉田大隊長の指揮に入り、当面の敵を攻撃すべし」との新しい命令を伝えた。

「ちよつと待つて下さい。私の部隊だけで、かならず前の敵陣地は突破します。吉田大隊長の指揮下に入るのを見合わせて下さい」と妹尾は必死の勢いで頼んだ。この機にのぞんで独力で突破できなければ、波多江少佐に合わず顔がない。他隊の力を借りて初めて敵陣を陥とせたとあつては、沢村連隊長の名譽は地に落ちるではないか。石にかじりついてもわれわれは独力で、敵陣を破らなければならぬ。

妹尾の決意は鋼鉄のように堅かった。負傷した川上中尉の後で、第九中隊を指揮していた塚原中尉が、全中隊の擲弾筒を後方に集結して、前面の敵機関銃座に対して集中射撃を行なつた。

突撃の機は今である。大隊の戦線が激しく動いて突撃に移る。轟然たる音を立てて擲弾筒弾が集中炸裂する。今は誰も無念無想である。最後の幸運がわれわれに訪れた。わが方の弾丸が、敵の勇敢な指揮官を吹き飛ばし、機関銃座を徹座に粉砕したのである。

「突つ込め！」の号令が、あちこちで起こつた。その瞬間、敵兵はハンケチを振りながらぞくぞくと投降してきた。敵の総員一六四名であつた。武器を捨てた彼らは笑っている。敵陣奪取に勢いを得たわれわれは、余勢を駆って追撃にうつつていく。

妹尾の命を受けて駆けつけた石川曹長から前線の吉報を聞く波多江少佐の顔は明るかつた。シンガポール最後の抵抗隊の一角が崩れた。シンガポールの市街が見える！ 夢に見たシンガポール市街が、いま眼前に広がっているのだ！

十五日午前、ゲーラングスライの陣地攻撃に成功して、第三大隊の士気はますます上がつたが、反対に兵力はいよいよ減少していった。この日の夕刻、わが部隊はどこどころに出没する敗残兵の掃討をしていた。

将校斥候に出した今井准尉が息をはずませながら帰つてきた。

「シンガポール陥落です。敵は全面的に降伏しました」

にわかに起こる感激の聲——将兵はみんな泣いている。この涙こそ戦う者にとって、すべての人間にとって最高の涙ではないだろうか。あちらこちらで肩から戦友の遺骨をおろし、生ける者に話すように小さな箱に向かって戦勝を告げている。

東洋の牙城シンガポール。パンコック出発以来、一日として忘れることのできなかつたシ

ンガポール。それがいま、一時間前までの戦闘はどこかに忘れてしまったように、まったく静寂にかえって、われわれの手中に帰したのである。
なぜか知らないが、ひとりでに、涙がとめどもなく流れた。だれもかれも泣いている。上官も部下も、思い思い、それぞれの感激にむせんでいる。われわれは遂に勝ったのだ。

あとがき

本書は、太平洋戦争における近衛歩兵第五連隊の奮戦記である。もっとくわしくいえば、戦争勃発の直前まで、われわれが駐屯していたカンボジアの古都セムリアップを出発してから、タイ、マレーをへてシンガポール攻略までの約六〇日間に、われわれが経験した戦闘記録である。

この記録は、当時、近衛歩兵第五連隊長であった私が、連隊本部付であった妹尾考泰中尉に命じて書かせたものを母胎にして生まれた。妹尾中尉は、しばらくすると中隊長に転じたので、連隊全般の作戦、行動などがわからなくなった。しかし彼は、それぞれの担任者を見つけて陣中で綴らせた。したがって、この戦闘記録は、断じて私人の記録ではなく、あくまでも近歩第五連隊全将兵の奮戦記録である。

さて、こうしてこの記録は、シンガポール陥落後に完成した。当時私は負傷して、すでに連隊長の地位を去っていたのであるが、妹尾中尉がこの草稿を、私のところに持参したとき

あるが、同時に所期の目的のとおり、十数年前の戦友や、不幸にして父や子や、兄や弟を、このマレーの地に失った多くの遺族の方々に、隈なく行きわたるよう分配する悲願を成就したいものである。

最後に、本書の上梓に当たって、惜しめない協力と激励を与えて下さった戦友連の稲葉正夫氏に厚く御礼申しあげる。

昭和三十一年九月

岩畔豪雄

には、「よくも書き上げたものだ」と内心驚いたほどである。

もとより近歩第五連隊の戦闘記録としては、またと得がたい資料であると同時に、人類の歴史のなかで、おそらくはふたたび繰り返すことのない、いや二度と繰り返し得ない地上戦闘記録の一つの典型であると確信している。

この草稿を妹尾中尉から受け取った後、私はスマトラ軍政部に転勤し、つづいてビルマ作戦に赴任したが、その間、この草稿は必ず持ち歩いた。

昭和二十年五月初旬、ビルマ戦線は、わが軍にとって破局的段階に達し、私が属していた第二十八軍は、折からの雨季をついてベグー山系の中に立て籠もった後、全軍挙げての敵中突破の壮挙となった。けれども、この悲壮な戦況のもとにおいても、この記録を終始肌身はなさず持ち歩いたばかりでなく、万一の場合を顧慮して、私は、妹尾中尉の書いた草稿から私のポケット用の手帳に写しとり、かさばる草稿は筆写が進むにつれて破棄していったのである。

ベグー山中で竹の家を造り、原始人さながらの生活をしたわれわれであったが、篠つく雨の音を聞きながら、蠟燭の灯の下で筆写をつづけた思い出は終生忘れることができない。

昭和二十年八月二十八日、飛行機でサイゴンを脱出して内地に向かった私は、身近無一物であったが、この近歩第五連隊の戦闘記録だけは、相変わらず肌身につけていた。

今から思えば一四年間の長きにわたってだれにも見せず、私の秘蔵物として温存しつづけてきたこの記録が、はじめて陽の目を見る機会をえたことは、私にとってまたとない喜びである。

光人社NF文庫

単行本 昭和三十一年九月 潮書房刊

シンガポール総攻撃

二〇〇〇年十月六日 印刷
二〇〇〇年十月十二日 発行

著者 岩畔豪雄

発行者 高城直一

発行所 株式会社光人社

東京都千代田区九段北一、九十一

振替／〇〇一七〇一六五四六九三

電話／〇三三三二六五一八六四代

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社宮本製本所

定価はカバーに表示してあります
乱丁・落丁のものはお取りかえ
致します。本文は中性紙を使用

ISBN4-7698-2286-3 C0195